

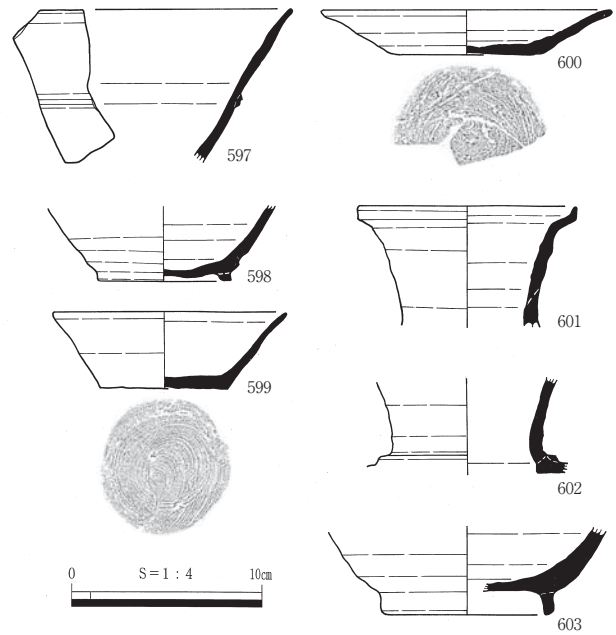
第5節 自然流路・1区遺構外出土遺物

1 古代流路(第24・209図、PL102)

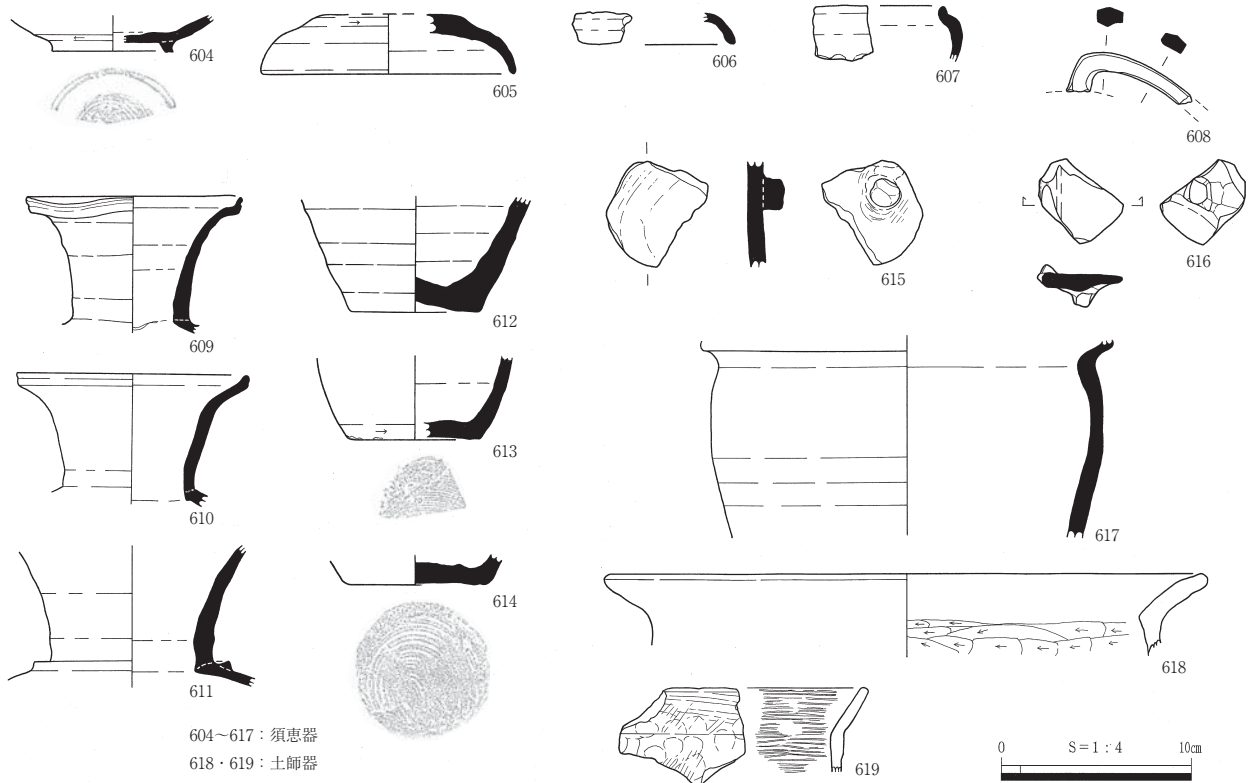
1区谷部平坦部、F6～G7グリッドに位置し、縄文時代に形成された自然流路の上層を古代流路とした。規模は判然としない部分もあるが、長さ20m以上、幅3.5mで、深さは最大40cmほどである。埋土は3層に分層され、いずれもシルト質粘土であることから、縄文時代と同じく澱みのような環境であったと考えられる。

出土遺物は須恵器と瓦が出土しており、須恵器が1130点と多い。自然流路は灰原の下方に位置することから、多くの資料は灰原からの二次的な流入と考えられる。

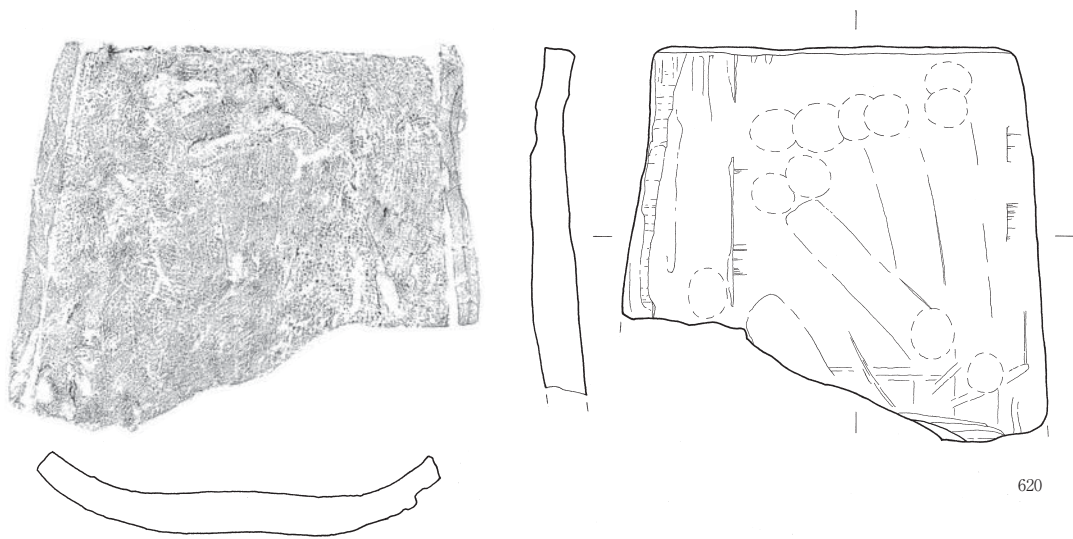
597～599は杯である。597は大型の高台杯で、体部中程に突帯を一条巡らせている。600は皿、601～603は壺である。601は受け口状の口縁部を持ち、602は付け根に突帯を巡らせている。



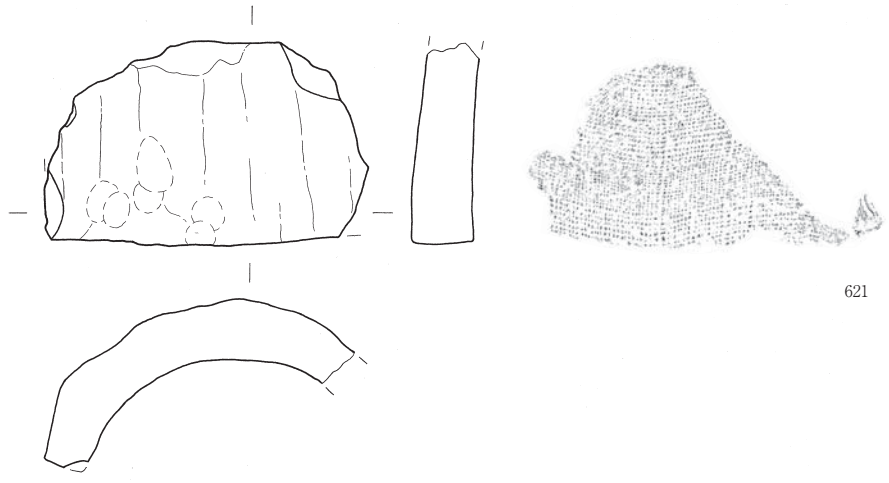
第209図 古代流路出土須恵器



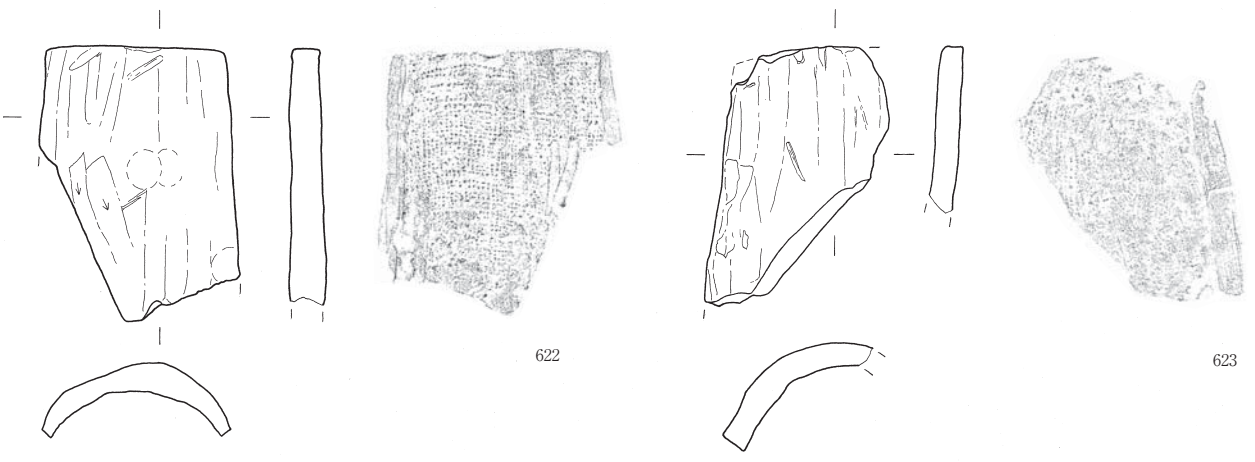
第210図 1区遺構外出土須恵器・土師器



620

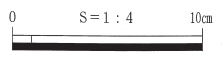


621



622

623



第211図 1区遺構外出土瓦(1)



第212図 1区遺構外出土瓦(2)

2 1区遺構外出土遺物(第210～212図、PL.102・104)

1区遺構外では表土や耕作土を中心に須恵器や瓦が出土している。

604～617は須恵器で、604は高台付皿である。605、606は蓋と考えられるが、つまみの有無が不明である。607は鉄鉢形鉢で、口縁部端部が僅かに屈曲して立ち上がる。608は平瓶の把手で、丁寧なケズリにより面取り成形されており、精緻な作りである。609～614は壺で、611は頸部付け根に突帯を有する。615、616は風字硯の足部とみられる。616は硯面に仕切りの突帯がみられる。617は鉢とみられ、やや胴部が深い形状をなす。

618、619は土師器で、618が甕、619は鍋である。619は製鉄場のテラス1で出土した566と類似しており、口縁部内外面に粗いヨコハケ目が施されている。

620～625は瓦である。620は平瓦で、狭端長は19.0cmを測る。凸面には指オサエがやや目立ち、凹面は布目を部分的にナデ消している。621～624は丸瓦で、621は瓦厚が3.0cmと厚く、広端長は19～20cm前後に復元される。624は極めて小さく、端面長は僅か8cm前後しかない。625は厚手の隅切瓦で、やや鋭角ぎみに切り落とされている。凸面は比較的丁寧なヘラケズリ調整が施されている。